

赤根地区の

ぜんじょうまつり

(善神王様)

武内宿弥神

(火まつり)

五穀豐穰

無病息災

家内安全

商売繁盛

国見町竹田津

武多都社

宮司 須磨惟愔

# 赤根善神王祭

(ぜんじょうまつり)

国見町 赤根地区 善神王祭について

一年に一度のこのお祭りは、赤根の里を挙げての一大行事です。

国見町には、櫛来古江、岩倉社の「ケベスマつり」と、この赤根の「ぜんじょうまつり」は、国東半島での神社の二大火祭りです。

このお祭りは、今から二百三十年位前の 明和年間（一七六四〜七二）に、現大分市の賀来に鎮座している「賀来神社」よりご分霊を、この赤根の里の住民『安藤家・秋吉家・佐藤家』の先祖の方々に依って勧請されたと言われております。初期民間信仰の形式なので、お宮のような社はなく、各人の家 または在家に逗留して、次の年には、新しい当場に遷座し、翌年は次の家に移るといふ「輪番制」をしていたようです。

そこで、善神王様という神様は一体何様であるうか。という疑問は誰もがもつと思います。また、ご神体は何なのか。

答えはたんなる『幟』（のぼり）なのです。

古い木箱の中に納められた『勧請善神王』と書かれた幟がご神体なのです。

善神王様とは、神話時代の日本最初の総理大臣で、五代の天皇に仕え、その後の日本の大和朝廷は、善神王と呼ばれた大忠臣の「武内宿弥」という人物によって支えられたのです。

その五代の天皇とは、

人皇第十二代 景行天皇より

// 第十二代 成務天皇

// 第十二代 仲哀天皇

// 第十二代 応神天皇

// 第十二代 仁徳天皇まで

の五代に仕え、何と三百六十余歳と言う最長の長寿の神様なのです。

前にも申しましたように、勧請した当初は、二・三軒でお祭りをしていたのですが、年を経るにつれて、住民より仲間に加えてもらえないものだろうか、との願いから、我も我もと仲間に組入られて、今では赤根地区の全戸に広まり、現在に至っている。また、赤根地区を大きく四つの迫に分け、大体平均十一戸前後に区切り、『一円坊迫・畑迫・下迫・大下迫』と分けられています。四地区に分けられたことにより、次の輪番を神様にお尋ねして、神官の「くじ」により当たり当場を決めるようになったのです。

大松明について一言いいますが、今でこそ電灯が明々と全戸に灯っていますが、七十数年

前は、裸電球が一つと言う淋しい有り様でした。当時は各自の家より一張りの御神灯をかがり、ご神幟のお供をして行列を作り、神社の広場に幸行していたのです。今でも當場より各家にローソクが配られています。

大松明は、外側を青竹で囲み、中に枯れ竹や麦わらなどを入れ、硬く丸めて、要所要所を「かずら」で締め付けて作り上げています。

中に入れる枯れ竹を集めたり、締め上げるかずらは、山仕事に行った時に見つけておき、祭りの準備のときに取ってくるのです。

※行事は

◎毎年九月一日、幟立て、午前中に幟立ての杭・幟棒・榊等を集め、當場元の家の内外を片付け、清掃して幟立ての祭り準備をなし、神事を待つ、当場の若者も老人等も総出で加勢をする。

◎夕方、神官にお祓をしていただき、直会の席に着く、直会の終わる頃、里内の若者達、また赤根地区の迫々より関係者や参拝者が集まって来る。

◎参拝者が善神王様にお参りし、必ず当場の主に挨拶をして外で待つ、太鼓が鳴りだし、口説きが始まり、若者を先頭に、見物人・参拝者も善神王幟の下で神踊りが奉納される。踊り方も四通り位あると思われる。途中でお酒と菓子全員に配られる。

◎ 九月五日、中日、一日の幟立てと同じ行事が行われる。

◎ 九月十日、本番 當場元で神幸の神楽があり、神社前広庭に向かってご神幸して、大松明立てがあり、神踊りが行われる。くじによって、次の當場が決まり、行列をして、當場元へ、家被をし、座敷相撲が奉納される。

※大松明と行事について

◎ 十日の夜八時より九時頃になると、神社の境内には町内より参拝者等が三々五々と集まってくる。

◎ 當場を出発した『幟』が神社の広場へ若者等の肩に担がれ次々と到着する。

◎ 幟は、神社境内の端に作られた幟立てに立て並べられる。ご神体の箱は、當場元の主人に担がれ到着、直ちに神前に安置される。

◎ 神社境内の中央に作られている周囲三層以上、長さ約十層、重さ約一トンは十分ある大松明に、神官がお被いをして、小松明の神火が大松明に点火される。その後、いよいよイベントの大松明立てが始まる。

◎ 最初は、大松明の下に敷かれた電柱のような丸太を、肩に担ぎ上げる。十数人が力を出し合い、少しずつ、少しずつあげて行く。

◎ 杉丸太にかずらを渡し、地面を一寸ずりにして上にあげ、ハシゴで左右のバランスを取り

ながら進む。

◎若者の中より選出された音頭取りのリーダーの指示に従い、全員協力一致で、バランスを考え、気合を入れてゆっくりと持ち上げて行く。

◎青竹の短い棒が使えるようになると、参拝者の中の若者も見物人も一斉に青竹に持ち替え、少しずつ上げて行く。

◎左右のバランスが崩れると、大松明は地面に叩きつけられ、再度同じ作業に取り組むことになるので、慎重に押し上げて行く。

◎大松明は斜めに揚げるのではなく、直立させる。丁度ローソク立てに、灯を点すように。

◎このお明かりが、善神王様に差し上げる「お灯明」なのです。

◎垂直に立った時、参拝者、見物人皆拍手を打ちならし、互いに成功した事の喜びを分かち合う。立て始めてより直立の状態にするまで、約一時間はかかる。

◎この天を焦がす炎の明かりの元で、神踊りが奉納される。神踊りの踊り子は、音頭に合わせ、先頭の若者に続いて踊りの輪を大きくして行く。

これらの事によって『善神王様』も、喜びを増して楽しく眺めている事だと思えます。

◎慰めの神踊りが最高潮に達したとき、神官は、世話役数人と区長立ち会いの上、次年の当場元を決める「くじ」を入れられ、「みくじ降ろし」の祝詞が奏上され、その後「くじ」

が降ろされる。降ろされた「くじ」は、すぐさま本人に伝えられる。

◎神踊りが奉納されている中で若者等は、踊り子、見物人、参拝者全員にティッシュペーパーの箱が配られる。そのティッシュペーパーの箱には、番号が大きく書かれている。大松明が燃え尽きる頃、神踊りも終わり、若者の世話役により「当たりくじ」の発表がある。当たりくじに当たった人は、確認の上景品をいただく、一段と夜は更けてゆく中、次期当場元の家の氏名が発表される。当たり当場の方は、すでに衣服を改め神前で待っている。当たり当場の方々は、急遽引き上げ、当場元に集合、家の内外を片付け、直会の準備をなし、幟立ての位置、直会の膳を運び、膳神王様を迎える準備をする。

◎若者は、広場の片付けと、ご神幟を運ぶ行列を組、次の当場に向かって宮下りをする。

大体午前一時過ぎに当場元に着く、直に当場元の家主は、ご神体の箱を神社より肩に担いで自宅の座敷の神床に安置する。ここで到着の祝詞と家祓いの神楽が奉納される。庭先では、すでに運び入れられた幟が立てられ、若者だけによる神踊りがお行われる。若者だけによる神踊りがお行われる間、婦人達による直会の準備が進む、神踊りの終わりに合わせて直会が出来るようにする。

次の当場地区は、前から決まっているので、どの家でも善神王様を迎えるための準備は出来ている。つまり、



◎ 必要な杭・棒・縄等。若し當場元がない品物があれば、有る家より借りてくる事。  
◎ 野菜が不足していれば、準備している家より持参する事。

◎ 豆腐は事前に下の町に頼んであり、若者達が運ぶ。この様に総合援助で助け合う。

※座敷相撲

善神王様（武内宿弥神）は相撲が大変好きで、相撲の神様とも言われています。

一時間もすると直会も終わる。直にお膳が片付けられ、座敷相撲の始まりを告げる。

若者の中より行司が選ばれ（時には長老が行う場合もある）、行司の呼び出しにより、力士が次々と座敷の中央に出てくる。四方の柱に当たらないように気を付けてする。若者達は真剣に力競べをするので、床が落ちて抜けるのではないかと心配するほどである。若者達による相撲の取り組みが終わると、奉納相撲と称して、當場元の主人と長老、又は、當場元の主人と前當場元の主人とが取り組みをする。但し、奉納される相撲であるので、立ち会って互いに取り組みをした所で「まった」をかけ、奉納相撲が終了する。

當場元の主人の挨拶によって、お開きとなり、神前に向かって拍手が打ちならされ、それぞれの家路へと向かう。すでに東の空は明るくなり、夜露のなかを帰る。

こうして例年のごとく『善神王祭』は終了するのです。

明日からは、稔の秋の野良仕事に、精を出すことであろう。

当資料は、国見町竹田津 武多都社宮司 須磨惟愷氏が編纂した印刷物を国見町山本純夫氏より提供いただき、電子データ化しました。 編纂年未確認 電子データ化 平成二十三年八月

【語句説明】

- ・ 赤根（あかね）地域名
- ・ 櫛来古江（くしく ふるえ）地域名
- ・ 幟（のぼり）幟旗のこと
- ・ 勧請（かんじょう）神仏の分身・分霊を他の地に移して祭ること
- ・ 当场（とうば）受け元
- ・ 直会（なおらい）神事の最後に、神事に参加したものと一同で神酒を戴き神饌を食する行事